

仙台市若林区 50代 男性 会社員



仙台港での信じられない光景

自分の車も流されていく

職場のある仙台港で震災に遭いました。

仕事の関係上、港のすぐそばに立地した事務所におり大津波警報が発令されたため、隣接した会社の関連施設の確認に回り、社員はそれぞれ自家用車をできるだけ離れた場所に移動させました。

しかし、この時点で津波がそこまで大きいとは思っていませんでした。指定された上階の避難場所に入ってドアを閉めたと同時に津波が来て、窓から自分の車が流されていく様子をただ見ていることしかできませんでした。

移動手段がないため一晩をそこで過ごし、翌朝泥だらけの中を歩いて帰宅しました。

会社の場所が場所だけに、許可が出るまでは自宅待機でした。

東京の本社や全国の支店からの救援物資が届き、自宅待機が解除され、会社で借りたレンタカーを社員で相乗りして出社する日が続きました。

2週間ほどして、流された車を発見し積んでいたものを取り出しましたが車自体は廃車にせざるを得ない状態でした。

今は少しでも自分の体験を多くの方に伝えることで、この後震災が起きた時に被害が少なくなるように願うばかりです。



千葉県 50代 男性 会社員



「休んだら歩けなくなる」との恐怖で、ひたすら歩く

東京の会社で地震に遭い、自宅は千葉。距離にしておよそ60キロ。夕方5時30分に会社を出て、京葉道路を歩いて自宅に向かいました。歩道は歩いて帰る人でいっぱい。中にはハイキング気分で歩道いっぱいに広がって、話しながら歩いている人もいました。私は携帯ラジオを聴きながら、ただ黙々と歩いていました。

途中にある自転車屋さんは、どこもお客さんでいっぱい。日も暮れ、市川あたりで懐中電灯を購入しました。歩きながら「どこで休憩しようか」と思い続けていましたが、「休んだら歩けなくなる」という思いもあり、とにかく歩き続けました。

西船橋駅近辺まで来たのが午後9時位。幕張の辺りでファーストフードのお店を見つけ、ようやく休憩をとったのが、深夜0時半頃。そして深夜3時半まで休憩し、「今から歩けば、途中で明るくなる」と、再び歩き始めましたが、体が冷えてしまうと駄目ですね、すぐに歩くペースがダウン。「どうしようか」と悩んでいた時、国道の上りが全く動いていないためユーターンして来たタクシーを捕まえる事ができました。結局家に着いたのは深夜4時30分頃。

「会社にそのままいても良かったのかもしれない」と後で考えましたが、その時は「とにかく家族の安否が知りたい」と思い、家に帰ることしか考えていませんでした。



焼津市 30代 男性 観光バス運転手



一瞬、高速道路の崩落を覚悟

どうにかバスを停車させた場所は、橋の繋ぎ目だった

震災当日は、バス3台で成田空港から静岡市内の高校まで修学旅行の迎えの乗務に就いていました。震災の時刻は、修学旅行の学生さんたちが、まさに乗車している時。高速道路の料金所を出たところで大きく揺れ、どうにかバスを停車させた場所は橋の繋ぎ目。一瞬、橋が崩れるのを覚悟しました。

羽田空港付近まで進むことができましたが、途中で2回目の大きな揺れに遭遇。高速を降りて、その先は一般道を進むことになりました。しかし幹線道路は渋滞で全く動きません。おまけに日が暮れるにつれ、停電のため信号機や街灯が消えて、いっそう混乱をきたす状況に。

結局、川崎から横浜の中心部まで、約5時間。その先は東名高速が富士まで通行止めが解除になったとの情報があり、インターチェンジまで約3時間かけようやく高速に合流。しかしその先が大津波警報のため東名も国道もすべて通行止め。「これは、お手上げ」となり、途中のサービスエリアで夜を明かすことになりました。

翌日は新幹線が始発から運転再開され、お客様を三島駅で新幹線に寄せ、静岡に戻すことができました。しかし私を含む3台のバスは、何とかして会社に戻らなければなりません。「行けば通行止め」「行けば通行止め」の繰り返しの中、結局静岡に着いたのは、地震発生から約27時間後の午後6時半でした。



高原町 40代 女性 主婦



子供の安全を第一に

登下校時の噴火に備え、避難場所を学校が確保

うちには小学校3年生と幼稚園の年長の子供がいるのですが、噴石の恐れがあるので学校や幼稚園へは、車で送り迎えをしました。仕事の都合など色々ありますが、やはり子供の安全には代えられませんから。

学校からヘルメットが支給されましたが、高い所から落ちてくる石の衝撃は相当なものだと思うし、実際に屋根を破るような大きさの物もありましたから心配でした。

今は車での送迎はしていませんが、登下校時に噴火した場合の避難場所を学校が確保してくれたので、もしもの場合があっても安心かなと思っています。

子供たちは普段から大人たちに「気をつけんといかんよ」と言われているので、今では常に山の様子を見るようになりました。



高原町 50代 男性 公園管理者



今も続く噴火への警戒

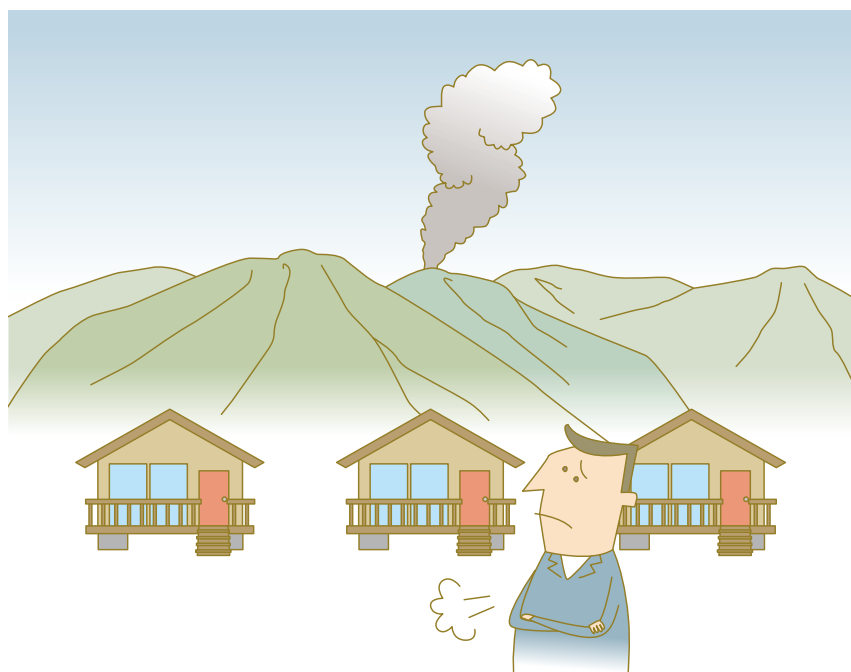
お客さんの安全が第一

今も噴火は続いとるんですが、ウチの公園は山の下にあるもんだから噴火しても音が聞こえんとですよ。だから、もしお客さんがおる時に噴火したらどうしようかと思って。昼なら良いんだけど、夜だったら大変なことになってしまう。ウチは宿泊のお客さんもいて、家族連れが多いですからね。

お客さんから「今もやってますか、大丈夫ですか？」って電話をもらうんですけど、簡単に大丈夫ですよ、来て下さいとは言えんとですよ。

噴火っちゅうのは突然起こるもんですから、事前の準備が出来んですし、もしもの時に備えるっちゅうのは難しいと思ってます。

一応の準備として、新燃岳の見える地域の人間から何か異変があった場合はすぐに知らせしてくれるよう頼んではおります。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

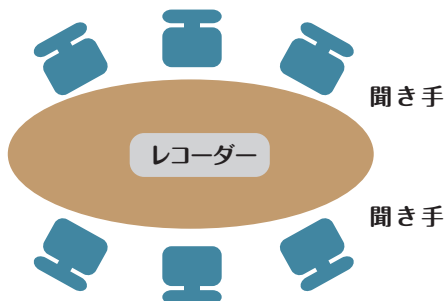
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

